カヴァラドッシは本当にトスカのことを愛していたのか

電気電子情報通信工学科３年　H. T.

自分は、カヴァラドッシが本当にトスカのことを愛していたのかについて疑問に感じたので、このことについて考察していく。

まず、第一幕冒頭でカヴァラドッシが、トスカという恋人がいながらも頻繁に訪れているアッタヴァンティ侯爵夫人の美しさに惹かれて、マグダラのマリアの絵のモデルにしているシーンがある。ここで、カヴァラドッシが、恋人がいながらも他の女性に目移りしてしまっているのがわかる。「妙なる調和」では、トスカへの愛を歌いながらもモデルの女性であるアッタヴァンティ侯爵夫人の「豊かな金髪と青い瞳」を、トスカの栗色の髪と黒い瞳と比較をしている。○この歌から、トスカへの愛はもちろんあるが、トスカが持っていない魅力を持っているアッタヴァンティ侯爵夫人を思い始めていることがうかがえる。

次に、アンジェロッティが教会へと逃げ込んでくる場面である。カヴァラドッシはアンジェロッティに対して「嫉妬深い女なのだ！」と発言している。○ここでトスカの欠点について言及しており、トスカのそういう性格についてあまりこころよく思っていないことがわかる。また、トスカが「今夜別荘に行きましょう」という誘いに対してもつれない態度をとっている。アンジェロッティを別荘に隠れさせることを考えていたためであると考えられるが、それにしてもその態度を見ると、彼が本当にトスカを愛しているのかどうか、疑問に感じざるをえない。

続いて第二幕である。カヴァラドッシが拷問されているのに耐えきれず、トスカがアンジェロッティの居場所をスカルピアに教えてしまう場面である。カヴァラドッシはその事実を知ったとたんトスカに対して「裏切ったな、呪われた女め」と言い放ち、トスカの手を払いのけるのである。たしかに、アンジェロッティの命がかかっている事態であり、興奮していることからそのような言動をしてしまったと解釈できるが、トスカにとっては、愛するカヴァラドッシが苦しんでいるのに耐えきれず、彼を救いたいという一心での行動であった。にもかかわらず、このような暴言を恋人に対して吐くことはおかしいのではないかと感じる。また、ナポレオンが勝ったという知らせに対して、カヴァラドッシが「勝利だ！」と叫ぶ場面である。ここで、カヴァラドッシは、制止しようとするトスカを激しい剣幕で突き飛ばそうとし、スカルピアを罵倒する。これにより、スカルピアの怒りを買い、カヴァラドッシは死刑にされてしまう。○本当にトスカを愛しているのならば、二人の明るい未来を期待して、こんな余計なことはしないほうが得策である。このような破滅的な言動をしてしまう

カヴァラドッシに、トスカへの愛は感じられない。

第三幕では、トスカと共に愛を歌う場面がある。ここでは歌によってトスカへの愛を表現しているが、今までの言動を見る限り本当の思いを述べているのだろうか。「これほどまでに生きることを愛しんだことはない」と歌っているが、〇死の直前になって自己愛からの「死にたくない」という思いがあるだけなのではと感じた。

最後に、カヴァラドッシはトスカを愛していながらも他の価値を優先しただけではないのかという疑問についてである。たしかにそのようにも考えられるが、カヴァラドッシにとってトスカの愛よりも優先してしまうものがあったということは、所詮トスカへの愛はそんな程度のものであったのではないかと思う。